

# 『理学沿革史』から『理学鉤玄』、『統一年有半』へ(初稿)

——兆民の翻訳・補訳・「哲理的所見」——

中 川 久 定

## 18世紀の「なりゆく自然」

今回の私たちの国際シンポジウムが扱う世紀は、明治期を中心とする19世紀ですが、それに先立つ時代を、まず一瞥してみましょう。18世紀日本哲学の流れ——特に自然哲学の流れ——の中で、中心をなしている考え方は、「なりゆく自然」という観念でありました。

たとえば、新井白石は、日本に密入国したイタリア人宣教師ヨハン・バッティスタ・シドッティを尋問したあとで筆をとった『西洋紀聞』(1715-1725年)において、超越的創造者「神」という観念を否定して、次のように書いています。

「天地万物おのずからなる事なし。必ずこれをつくれるものあり」という説のごとき、もし其説のごとくならむには、デウス、また何もの、つくるによりて、天地いまだあらざる時には生まれぬらむ。デウス、もしよくおのずから生まれたらむには、などか天地もまたおのずからならざらむ<sup>1)</sup> (下線中川)。

神によって「つくられた自然」というユダヤ・キリスト教的観念と対立する、この「おのずからなる自然」という概念は、18世紀の日本において、決して白石だけに特異なものではありませんでした。事実、相互の間にかなる影響関係も認められない、この時代の二人の自然哲学者、安藤昌益と三浦梅園のうちにも、この同じ基本概念が認められます。昌益はその主著「自然真営道」「大序」(1753年)のなかで、こう書いています。

自然とは何か。互性・妙道の呼び名である。互性とは何か。答えて曰く、始めも終わりもない一つの土活真が自行して、小にあるいは大に進退することである<sup>2)</sup> (下線中川)。

また梅園は、彼の体系的自然哲学の書「玄語」(1753-1775年)の補足的解説書「贅語」(1756-1773

「理学沿革史」から「理学鉤玄」,「統一年有半」へ

年)のうちで、こうっています。

無限の拡がりであって、物であって気でないものはない。何があえて気に先んじようか。何が気よりおくれようか。それだから無と有は同じくなるのだ。虚と実とはひとしくなるのだ。首尾があるわけではない<sup>3)</sup> (下線中川)。

このように、白石、昌益、梅園という、18世紀日本を代表する最高の哲学者たちの著作に共通して見いだされるのは「なりゆく自然」の観念でありました。ここで私たちの目を、同時代のフランスに移してみましょう。そこでもまた私たちは、超越者による自然の創造という、伝統的なユダヤ・キリスト教的観念を否定し、一切を「なりゆく自然」として、内在的に説明しようと試みた思想家たち、すなわち唯物論者たちに出会います。その典型的な一例としてデイドロをあげてみましょう。彼は、対話作品『グランベールの夢』(1769年)のなかで、対話者グランベールの口を借りて、こう述べています。

一切が変化し、一切が過ぎ去る。存続するのは全体だけだ。世界は絶えず始まり、絶えず終わっている。時々刻々が世界の発端であり、終末である。それ以外の発端や終末をもったこともなかったし、これからももつことはない<sup>4)</sup>。

じゃ一体、あなた方のおっしゃる個体とは、どういう意味なのかね。そんなものは存在しないんだよ。そうとも、決して存在しない。……ただひとつ大きな個体があるだけだ。それが全体だ。[……]生命とは、一連の作用と反作用である。……私が生きている時には、分子の集合体として作用と反作用を行う。……では私は、死なないのだろうか。……そうだと、私にせよ、他のなにもものにもせよ、今いったような意味では決して死なないのだ。……生まれて、生きて、死ぬこと、それは形態を変えることだ。……ある形態をとろうと、別の形態をとろうと、それは問題ではない。それぞれの形態は、自らに固有の幸福と不幸をもっている<sup>5)</sup>。

ここに見いだされるのは、次のような3つの明確な主張です。

1. 宇宙には、発端も終末もなく、ただなりゆく自然しか存在しない。
2. 人間という独立した個体は存在せず、それはただ、自然という大きな全体の部分に過ぎない。
3. さらにまた、人間の生も死も、ただなりゆく自然内部の形態的な変化に過ぎない。

18世紀日本の自然哲学者たちの自然観と、デイドロのそれとの間には、このように、はっきりと、ひとつの並行関係が見いだされるのです。

## 「理学鉤玄」

さて、以上に一瞥したような18世紀日本・フランスの並行的な思想状況を前提にした上で、私たちの検討の焦点を今日の報告の主題、19世紀後半の日本における中江兆民の著作の上に向け直してみましょう。特に検討してみたいと思いますのは、彼の二冊の哲学的著作、すなわち「理学鉤玄」(1886[明治19]年)と、彼の絶筆「統一年有半」(1901[明治34]年)です。ただし、前者「理学鉤玄」は、厳密に言えば、翻訳と著作との境界線上に位置するもので、井田進也氏のことばを借りれば、「自由編訳書」(「数種類のテキストの読解にもとづいた編訳」と称すべきものなのですが<sup>6)</sup>、ここでは兆民自身が望んでいたように、この本を彼の著書として扱っておきましょう。彼は「凡例」の中で、次のように断っているのですから。「本書博ク諸家ヲ蒐採(しゅうさい)シテ、文ハ則(すなわ)チ別ニ結選シテ初(はじめ)ヨリ原文ニ拘泥(こうでい)セズ、此(こ)レ其著ト称シテ訳ト称セザル所以(ゆえん)ナリ」<sup>7)</sup>と(下線中川)。

ところで「理学鉤玄」、「統一年有半」二書の間には、一見非常に大きな執筆態度の違いが存在しています。すなわち、ヨーロッパ哲学の諸流派を紹介する前者が——ただ今引用しました兆民自身の「凡例」によりますと——「著書一己ノ見ハ少モ其間ニ厠(まじわ)ル有ラズ」<sup>8)</sup>、「博ク諸家ヲ蒐採(しゅうさい)」する、という立場に立っているのに反して、後者は、——兆民の弟子、幸徳秋水の「引」によれば——最初からはっきりと著者自身の「哲理的所見の一斑」、すなわち「ナカエニスム」の基本原理を展開することを意図していたからです<sup>9)</sup>。

けれども、このような相違点は見かけ上のものにすぎません。なぜなら、客観的学説紹介の体裁をとる「理学鉤玄」においてさえも、主体的自己主張の形態をとる「統一年有半」と同じように、著者兆民自身の批判的観点が、明瞭に浮かびあがってくるからです。すなわち、「學術ノ類ハ必ズ考驗シテ以テ実迹ニ徴シテ然後始テ其信ズ可キヲ見ル」<sup>10)</sup>という立場です。

巻之一、巻之二、巻之三という三部構成をとった「理学鉤玄」における兆民は、この「考驗」の立場に立って、巻之一で「法国学官ノ虚霊説(スピリチュアリズム、オフィシエール)」の詳細と、ついで巻之二で「感覺説(サンシユアリズム)」、「意象説(イデアリズム)」、「神物一体説(パンテイスム)」、「神人感合説(ミスチシスム)」等をそれぞれ、客観的に紹介しています。そして最後に巻之三の第一章「実質説(マテリアリズム)」にいたって、巻之一、巻之二で紹介した諸流派の学説に対して激しい論駁を加え、そのあと「懷疑説(セプチシスム)」に簡単に言及して、この本の全体を終えています。

「理学沿革史」から「理学鉤玄」,「統一年有半」へ

宮村治雄氏は、その画期的な研究「理学者 兆民」のなかで、「理学鉤玄」巻之一、巻之二を構成する諸章がそれぞれ依拠していたフランス語の諸原典を実証的に明らかにしています<sup>11)</sup> (両者の対照表参照<sup>12)</sup>)。さらにまた、巻之三、第一章「実質説」の部分に関しても、それが、アンドレ・ルフェーヴル『哲学』(1876年)を典拠したものであることを、疑いようのない形で突きとめました<sup>13)</sup> (対照表参照<sup>14)</sup>)。ただ私が、本日の報告で試みたいのは、「理学鉤玄」「実質説」の章には、ルフェーヴル『哲学』以外の典拠もありうるのではないか、という仮説を提出することです。

兆民は、「実質説」の章において、ルフェーヴル『哲学』を翻案しながら、「群神ノ宗旨(多神教)」、「精神不滅ノ説」、「死後天堂賞罰ノ説」、「基督宗」等に激しい批判を加えています。兆民(=ルフェーヴル)によれば、こうした「謬戾」、あるいは「妄念」が生じてくるのは、原因と結果の連鎖に過ぎない自然の運動のなかに、「神」(「万物ノ一大原因」)の意志と行為とを想定するからにほかならないのです。次の引用文をご覧ください。

夫レ原因ヲ以テ意欲ノ致ス所ト為シ是ニ於テ一原因ヨリ他ノ一原因ニ進ミ、是ノ如クニシテ層累シテ上ボリ以テ神ノ造物ノ業ヲ証スルコト是レ古来宗教家并ニ原理想家ノ妄念ナリ、而テ此妄念ハ深く人ノ頭脳中ニ淪浹シテ所謂第二ノ性ヲ成スニ至リ、今日ニ在リテハ學術ノ考驗頗ル其盛ヲ極メタルモ、夫ノ良智説及ビ意象説一切虚靈ノ一派ニ属スル者猶ホ頑然トシテ変ズルコト能ハズ、蓋シ學術ノ考驗ニ由リテ之ヲ言フトキハ、吾人ノ為スコト有ルモ吾人真ニ自ラ之レガ原因タルニ非ズシテ必ズ外来ノ旨趣ノ使フ所ニシテ、吾人ノ意欲ハ実ハ自ラ決シテ此旨趣ニ従フト云フ爾、若夫レ万物ノ網縊化成スルハ之ヲ事迹ト謂フ可シ、之ヲ行為ト謂フ可ラズ、事迹トハ自然ニ発シテ原因効果ヲ為スノ謂ナリ、行為トハ必ズ意欲ノ在ル有リ、万物ノ化成スルガ如キハ豈一々意欲有リテ爾ラン哉、

夫レ万物ノ網縊化成スル所以ヲ論ジテ之ヲ意欲有ル一大原因ニ帰スルガ如キハ古今虚靈説ヲ為ス者ノ妄念ニシテ、所謂原理想ノ基趾実ニ是ニ在リ、プラトンヤアリストットヤデカルトヤレイブニットヤヘーゲルヤショッペンホーエルヤアルトマンヌヤ皆然ラザル莫シ、或ハ名ケテ至善<ビヤン、イデアール>ト曰ヒ或ハ有為<アクチウイテ>ノ性ト曰ヒ或ハ大原因<コース、エヒシヤント>ト曰ヒ或ハ独立不倚ノ物<シヨーズ、アンソアー>ト曰ヒ或ハ意象ノ極致<プランシブ、イデアール>ト曰ヒ或ハ我非我一体ノ境<モアー、イダンチック、オー、ノンモアー>ト曰ヒ或ハ渾淪無心<アンコンシヤン>ノ理ト曰フモ、実ハ皆神ヲ指スニ外ナラズシテ、以為ヘラク人類庶物ノ外別ニ意欲有ル一大原因有リト、而テ其謬見ハ意欲原因ノ二義ヲ混淆セシ所ノ処ニ存スルノミ<sup>15)</sup>。

この引用部分は、次に掲げるルフェーヴル『哲学』のテキストを、ほぼ忠実にたどっています。翻案というよりも、むしろ翻訳、あるいは意識と呼ぶほうが適切でしょう。

Les faits dont il n'est pas la cause (et qu'il assimile fatalement à des actions) ont nécessairement pour cause un être quelconque, analogue ou supérieur à lui-même, et qui raisonne et veut comme lui. [...] Voilà le double point de départ de l'illusion. Et elle est si forte qu'elle persiste aujourd'hui encore, après que la science a démontré que l'homme n'est qu'une cause subordonnée, une cause par contre-coup; après que la science a établi que les faits de la nature ne sont point des *actions*, et que les causes dont ils procèdent, les causes dont l'homme lui-même est une résultante particulière, n'ont aucun rapport avec la volonté consciente, cause immédiate des vraies *actions* humaines. C'est pourquoi tout l'édifice métaphysique repose sur une confusion, sur un faux sens. On verra que l'idée, si superficielle, de la volonté (faculté humaine), transformée en cause indépendante et en cause universelle, est la base de tous les systèmes rationalistes, depuis Platon jusqu'à Hartmann, en passant par Aristote, Descartes, Leibnitz, Kant, Hégel, Schopenhauer, etc. Il n'y a rien d'autre dans le Type, l'Harmonie préétablie, la Cause efficiente, la Chose en soi, l'Idée, le Moi identique au Non-moi, l'Inconscient. L'attribution d'une volonté aux causes extra-humaines est le pivot de toute métaphysique<sup>16</sup>).

ここに認められる唯物論者ルフェーヴルの立場もまた、私がこの報告の最初から一貫して「なりゆく自然」の名で呼んできたものであることは、いまさら強調するまでもありません。ただ、ここでご注意いただきたいのは、『統一年有半』でもう一度繰り返されるこの「なりゆく自然」という兆民の基本観念が、ルフェーヴルのテキストを媒介にして、初めて兆民の内部で思想的に結晶しえた、という点です。

『理学鉤玄』「実質説」の章において、「なりゆく自然」の説は、このほかにも少しずつ表現を変えながら、なん度か反復されています。例えば――

所謂原子ハ至微至細ニシテ触知ス可ラザルモ學術ノ考驗ニ抛ルトキハ極テ活潑靈動シテ瞬時モ息ムコト無シ、夫レ此靈活ノ原子相聚リテ物ヲ成ス、此レ正ニ万物ノ日夜網緼化成シテ離合生滅ノ変無窮ニ相踵グ所以ナリ、是レニ由リテ之ヲ考フレバ、世界万物ハ無数原子ノ相牽引シ相排斥スルニ因リテ形象ヲ発スル者ニシテ、其状態ハ猶ホ砂塵ノ颯風中ニ翻転スルガ如クナルノミ<sup>17</sup>。

この部分の典拠になっているルフェーヴルのテキストは次のとおりですが、両者を照合してみますと、それぞれは決して忠実に対応していません。兆民の文は、むしろ翻案というべきもので

『理学沿革史』から『理学鉤玄』、『統一年有半』へ

しょう。

Nous avons vu que le mouvement est la manière d'être de la matière, qu'il est à la fois la condition et l'effet de toute combinaison atomique ou moléculaire. En lui-même, il n'est rien que le fait du déplacement continu de toutes les particules. Le mouvement prend divers noms, suivant qu'il affecte soit tous les corps, soit divers groupes de corps, et suivant les différents ordres de faits qui l'accompagnent<sup>18)</sup>.

もう一箇所だけ、『なりゆく自然』の主張を引用しておきましょう。

夫レ網緼化成シテ息ムコト無キハ是レ世界衆星並ニ万物循フ所ノ自然ノ理ニシテ、或ハ凝結シ或ハ壊散シ既ニ壊散シテ復タ凝結シ、此ノ如クニシテ無窮ニ相繼グ是レ大勢ナリ<sup>19)</sup>。

上の引用文の最後「是レ大勢ナリ」の一句が、『なりゆく自然』という無限運動の自発性を強調しています。ただし、兆民が参照したと想定できる次のルフェーヴルの原文とは、必ずしもそのまま対応してはいません。

Et ce travail de la substance se continue sous nos yeux. Bien que modifiées par la succession même de leurs effets, les causes du passé sont encore les causes du présent et de l'avenir. L'humanité, qui a vu déjà plusieurs fois changer la face du monde, qui garde encore le vague souvenir de ces révolutions, croit jouir d'un répit durable; qu'importent en effet à l'individu, chose éphémère, les surprises réservées à des générations lointaines? Mais dans ses haltes apparentes, la nature prépare des changements aussi inconnus qu'inévitables<sup>20)</sup>.

### 『統一年有半』

『理学鉤玄』のなかで、ルフェーヴルの翻案として表現されていた『なりゆく自然』の考えは、兆民が死の直前に——幸徳秋水によれば「僅かに十日ばかりで」<sup>21)</sup>——執筆、完成した『統一年有半』において、はるかに豊かなイメージをともしつつ、この度は兆民自らの強い哲学的主張の形をとって表明されるにいたります。その典型的な一例を次にあげてみましょう。

所謂（いわゆる）不朽とか不滅とかは精神の有する資格では無く、反対に躯体の有する資格で有る、何となれば、彼れ躯体は若干元素の抱合より成れるもので、死とは即ち此元素の解離の第一歩で有る、併し解離はしても元素は消滅するものでは無い、一旦解離して即ち身腐壞するときは、其中の気体の元素は空気に混入し、其液体若くは個体のもは土地に混入して、要するに各元素相離れても、各々此世の執れの処にか存在して、或は空気と共に吸嘘（きゅうきよ）せられ、或は草木の葉根に摂取せられ、畜（ただ）に不朽不滅なる而已ならず、必ず何かの用を為して、輾輻窮已（てんでんきわまり）無しと云ふので有る<sup>22)</sup>。

「理学鉤玄」においては、「なりゆく自然」の説は完全に理論的文脈のなかで主張されていました。それに反して、「統一年有半」では、上に見られるように、この説が「死」のイメージのなかで、しかも兆民の身に近づきつつある自らの「死」のイメージのなかで展開されています。しかも彼は、「なりゆく自然」という哲学的観念を根拠に、この「死」のイメージに対して、あえて積極的・肯定的な意味を与えているのです。

確かに肉体は解体する。しかし、それを構成していた元素の水準においては「畜（ただ）に不朽不滅なる而已（のみ）ならず、必ず何かの用を為して、輾輻窮已（てんでんきわまり）無い」というこの主張。「不朽不滅」、「而已ならず」、「必ず何かの用をなす」、「輾輻窮已無い」という、すべて肯定的な価値をもつ四句の連続が生みだすこの積極的な響きにご注意ください。

人間という個体の死が、より低次の水準においては、同時に個体構成元素の不死をともなっているという兆民のこの主張は、18世紀から、19世紀をへて20世紀にいたるヨーロッパのいく人かの唯物論的思想家のうちにも見いだされます。例えば、18世紀フランスのディドロ。本日の私の報告の初めに引用した『グランペールの夢』の一節を、ここでもう一度思い出してください。

ディドロはそのほか、例えば『生理学原理』（1778年）のなかでも、こう書いています。「はっきりと区別できる二つの、あるいは三つもの生命が存在していることは確実である。統一ある生体全体の生命。各器官の生命。分子の生命」と<sup>23)</sup>。したがって、ディドロによれば、人間は肉体の死のあとも、器官の水準で、ついで分子の水準で、なおも生き続けることができるのです。ジャン・マイエール『科学者ディドロ』のこたばを借りれば、「死はそこ[分子の水準]で停止」します<sup>24)</sup>。

またフロイト『快感原則の彼岸』（1920年）がA. ヴァイスマンとともに主張するところによれば、「高等な生物のゾーマー[身体]は、内的な原因から一定の時期に死滅するが、原生動物[生殖に奉仕する胚原形質]は不死であり、最初の生命発生以来、現在にいたるまで、ずっと生き続けている、というのです<sup>25)</sup>。ディドロもフロイトも、兆民と同じ思想的流れに属していることが、これによって確認できるでしょう。

「統一年有半」に話題を戻しましょう。「なりゆく自然」という、これまで私が検討してきた兆

『理学沿革史』から『理学鉤玄』、『続一年有半』へ

民の基本的主張——フランスの唯物何者ルフェーヴルに触発された主張——は、先に引用した白石『西洋紀聞』の場合とまったく同じように、超越者「神」による自然創造説に対する批判という形をとっています。例えば次のように——

余は繰返して云ふ、此広大無辺の世界、此森然たる万物が、一個の勢力〔神〕に由りて一々に造り出されたと云ふよりは、従前他の形態を有せしものが、自然に可醇して、此万彙に変じ来って、乃ち自然に出来たと云ふこそ、更に数層哲学的で有る、完全なる判断力を有するものは、此二説の間に、決して躊躇せぬで有ろうと思はれる<sup>26)</sup>。

ここには、白石のキリスト教（『創世記』）批判と同じ「なりゆく自然」の声が響いています。もう一箇所引用してみましょう。今見た引用文中に鳴り続けていた主題の変奏です。

世界万有既に無始で有る以上は、造と云ふ事は無い筈で有る、何となれば甲の形の前には、必ず何等かの形で存して居たもので有れば、別に新に造る必要は無いので有る、自然に摩盪可醇して他の形に転ずる以上は、何を苦しんで他の形を造ることを為さんやで有る、[……]無始とは何で有るか、凡そ物は大小を問はず、皆無始で無ければならぬ筈だ、何故かと云へば、始とは此人界の語で、他に在ったものが目前に来るのか、他の形のものもが目前の形に変じたのか、即ち蛾が卵を生じ卵が蚕を生ずる如く、一の形から他の形に変じて、吾人の浅智で斯る成行に気附がずして丸で無かったものが出来たかの如く思ふよりして始と云ふ語が意義を見（あら）はして来るので有る。[……]又此世界万有は無終で無ければならぬので有る、有が無になる道理は無い<sup>27)</sup>。

## 『理学沿革史』

兆民の内部で、明確な像を結ばなかった漠たる観念が、『理学鉤玄』の執筆を機会に、ルフェーヴルの思想によって触発され、『続一年有半』の主調「なりゆく自然」の観念となって結実したことは、これまでに見てきたとおりです。しかし、触媒となったのは、単にルフェーヴル『哲学』だけだったのでしょうか。

『理学鉤玄』と同じ1886（明治19）年に出版された兆民の翻訳『理学沿革史』に注目してみましょう。原書は、Alfred Fouillée, *Histoire de la philosophie*, Delagrave, 1879, 2<sup>e</sup> éditionです。原著者フーイエは、当時、パリの高等師範学校教授でした。兆民訳「第七章 第十八紀法朗西ノ理学」「ゲテロー」の項に、次の一節が見いだされます。



其説蓋シ実物ヲ以テ物ノ本体ト為シテ以為ラク、世界ノ全体是レ正サニ人類庶物ノ本体ニシテ人類庶物ハ特ニ其支節タルニ過ギズ、而シテ変転化成シテ無窮ニ相踵グコト是レ庶物人類ノ共ニ循フ所ノ至理ナリ、

是故ニ生ト死トハ特ニ外貌ノ一変化タルニ過ギズシテ、本質ノ常々醗酵シテ已ムコト無く生氣ノ常々流転シテ極無く以テ世界庶物ノ生滅ヲ為ス、是レ変化中不変ノ一理ナリ、此節蓋シ曩キニエラクリットノ倡道セシ所ナリ<sup>28)</sup>。

フランス語原文は次のとおりですが、兆民訳は全体の趣旨をくんだ意識というべきものです。なお、原文で「自然をひとつの大きな全体と考える」と書かれている部分は、兆民訳では、「世界ノ全体 (la nature) 是レ正サニ人類庶物ノ本体 (un grand Tout) ニシテ」となっています。

Diderot [...] se représente la nature comme un grand Tout dont les individus sont les parties et dont l'universelle transformation est la loi. Naître et mourir, ce n'est que changer de forme; une fermentation sans relâche, un échange incessant de substance, une circulation perpétuelle de la vie, voilà l'énigme de l'existence, telle que déjà Héraclite l'avait conçue<sup>29)</sup>.

この報告の最初で、私は18世紀フランス唯物論者たちの「なりゆく自然」の考えに言及しました。その際、ディドロ『グランペールの夢』の一説を引用したあと、この引用文中に認められる自然観の特徴として、次の三点を掲げておきました。

1. 発端もなく終末もない、なりゆく自然。
2. 自然という大きな全体に属する部分としての人間という個体。
3. 自然の形態的变化にすぎない人間の生と死。

そして、先に掲げた『理学沿革史』「チデロー」の項が紹介しているこの哲学者の自然観は、正確に上の三つの特徴を表現しています<sup>30)</sup>。

『統一年有半』において、自らの哲学的世界観として、兆民が「なりゆく自然」の観念を前面に押し出した時、宮村治雄氏が発見・実証した『理学鉤玄』「実質説」の典拠であるルフェーヴル「哲学」と同時に、自らの翻訳書『理学沿革史』「チデロー」の項からも触発されたに違いないことは、以上の検討から明らかではないでしょうか。

## 補訳から「哲理的所見」へ

『理学沿革史』の原著者フーイエは、「叙論」の「緒論」において、哲学史を執筆するに際して、自らに課した条件として、「諸家ノ説ヲ講求セント欲スルトキハ、当ニ身ヲ其人ノ地ニ置キ (Pour comprendre, il faut se placer au point de vue d'autrui)」、「論者ノ意中ニ潜入 (entrer dans la pensée des autres plus profondément qu'eux-mêmes)」するという「方式 (méthode)」をあげています。すなわち、「論者ノ本旨ノ在ル所苟 (いやしく) モ明瞭ナルトキハ、其未 (そのいま) ダ言ヒ及バザル所ト雖 (いえど) モ已レ当ニ察シテ之ヲ補フ可シ (pousser [la pensée des autres] plus loin qu'eux pour en bien apercevoir la direction)」というのです<sup>31)</sup>。

フーイエのこの一説は、翻訳家＝思想家兆民が、そのまま自らのものとした「方式」であったように思われます。すなわち、フーイエ、あるいはルフェーヴルを翻訳しつつ、原著者の「未ダ言ヒ及バザル所ト雖モ已レ当ニ察シテ之ヲ補フ」という「方式」です。この補訳から、兆民自身の「哲理的所見」までは、ほんの一步にすぎないものだったでしょう。

ただし、注意しておかねばならないことがあります。ルフェーヴル『哲学』の全体から、兆民『理学鉤玄』「実質説」の章をへて『統一年有半』にいたる道は一直線です。唯物論者ルフェーヴルと「無神無靈魂」の主唱者兆民とは同じ立場に立っています。これに反して、『理学沿革史』の原著者フーイエは、兆民と立場を異にしています。フーイエは決して唯物論者ではありません。

「虚霊自由ノ理学 (la philosophie de la volonté et de la liberté idéale), すなわち道徳的理想主義の立場に立ち、「調諧ノ方式 (méthode de conciliation)」と称する独特の方法によって哲学史の叙述を試みた哲学史家です<sup>32)</sup>。したがって、フーイエの哲学史全体のなかから、「ヂデオロー」の項だけを引き出すことは、フーイエの紹介という立場に立つ限り、彼を歪め、「誤解」したことになるでしょう。しかし、兆民の場合、これは、極めて意図的な「誤解」でした。そしてこの意図的で、壮大な「誤解」からこそ、「無神無靈魂」説という兆民独特の哲学、すなわちなカエニスムの「創造」が可能になった、ということができるといえるでしょう。

本日の主題を離れて、最後にひとこと付け加えておきます。18世紀において、フランスのディドロと、日本の自然哲学者たちとの間には、「なりゆく自然」の観念をめぐって、不思議な共鳴がこだましあっていました。ちょうどそれとおなじように、19世紀の世界でも、同じ「なりゆく自然」の共鳴が、フーイエを介したディドロと、兆民との間にも響きあっているように、私には思えてなりません。

注

- 1) 『西洋紀聞』松村明校注,『新井白石』(『日本思想大系』35), 岩波書店, 1975年, 79 ページ。漢字を平仮名に変え, かつ送り仮名に変更を加えた部分があります。以下, 昌益, 梅園からの引用に関しても同様です。
- 2) 『自然真営道』抄, 『安藤昌益』責任編集野口武彦(中公バックス『日本の名著』19), 中央公論社, 1984年, 77ページ。  
野口武彦によれば, 「自然」ということばは, 宇宙の運行に関しては, 「自(ヒト)り然(ス)ル」と, 人間の行為に関しては, 「自(ワレ)ト然(ス)ル」と, それぞれ訓読されます。しかし, 人間が「ワレトスル」行為と, 宇宙が「ヒトリスル」運行とは, 本質的に同一であって, そこに対立は存在しない, というのです。引用文中にはまた, 「互性」という概念が現れていますが, これは「性ヲ互(タガイ)ニス」と訓読されます。昌益によれば, この宇宙では, 相反し, 相補う二つの性質が和合し, 一つの完全な状態をつくり出すというのですが, 「互性」とは, その際の相補性を意味しています。最後に, 「土活真」についていえば, 昌益は, 伝統的陰陽五行説でいう五気(木・火・土・金・水)のうち, 特に土を重視し, これを「活真」(あるいは「真」, 「中真」, 「一真」と呼び, 宇宙万物の根元としています。本来, 土の精気である「活真」の進退に応じて, 木・火・金・水の四元素が分化してくる, というのです。前掲書 380—381ページ, 野口の「補注」。  
なお, 加藤周一は, 昌益の自然哲学に関して次のような説明を与えています。「「気」が運動するとき, そのし方には「進・退」(宋学の「陰・陽」に相当)と, 「大・小」がある。「進・退」と「大・小」の四つの組合せが, 「木・火・金・水」の「四行」(宋学の「五行」の「土」を除いた残り)を生じる。「四行」のそれぞれに「進・退」があるとして, 「八気」を生じ, さらに万物を生じる。この考え方は, あきらかに宋学の構造を踏襲しているが, 宋学の「理」に相当するものは, みられない。すなわち「気」の一元論であって, 万物の性質は, それぞれ「気」の運動(進退・大小)のあらわれであるから, 相互補足的なものだとされる」と。『加藤周一著作集』第5巻(『日本文学史序説』下), 平凡社, 1980年, 120ページ。
- 3) 『贅語』抄, 『三浦梅園』責任編集山田慶児(中公バックス『日本の名著』20), 中央公論社, 1984年, 486ページ。
- 4) Denis Diderot, *Œuvres complètes*, Hermann, 1987, t. XVII, p. 128.
- 5) *Ibid.*, pp. 138-140.
- 6) 井田進也「中江兆民の翻訳・訳語について」, 『翻訳』岩波書店, 1982年, 306, 307ページ。
- 7) 『中江兆民全集』(以下『全集』と略称)編集松本三之介, 松沢弘陽, 溝口雄三, 松永昌三, 井田進也, 岩波書店, 1984年, 第8巻, 3ページ。
- 8) 『全集』前掲箇所。
- 9) 『全集』, 1983年, 第10巻, 225ページ。
- 10) 『全集』, 1984年, 第7巻, 218ページ。なお, 「考験」には, 「エクスベリヤンス *expérience*」, または「エクスベリマンタシヨ *expérimentation*」という片仮名が振られています。前掲書, 「『理学鉤玄』の基本用語およびそのフランス語表記一覧」, 6ページ。
- 11) 「中江兆民における「ルソー」と「理学」」, 宮村治雄『理学者 兆民』みすず書房, 1989年。
- 12) 前掲書, 57—61ページ。
- 13) 「中江兆民と「実質説(マテリアリズム)」」, 前掲書。
- 14) 前掲書, 228—230ページ。

「理学沿革史」から「理学鉤玄」、「統一年有半」へ

- 15) 「全集」第7巻, 227—230ページ。
- 16) André Lefèvre, *La Philosophie*, Paris, C. Reinwald, 1870, p. 14.
- 17) 「全集」第7巻, 244ページ。
- 18) Lefèvre, *La Philosophie*, p. 448.
- 19) 「全集」第7巻, 253ページ。
- 20) Lefèvre, *La Philosophie*, p. 469.
- 21) 「全集」第10巻, 226ページ。
- 22) 前掲書, 241ページ。
- 23) Diderot, *Œuvres complètes*, t. XVII, pp. 310-331.
- 24) Jean Mayer, *Diderot, Homme de science*, Rennes, Imprimerie Bretonne, 1959, p. 259.
- 25) 「フロイト著作集」人文書院, 1973年, 第6巻, 180ページ。
- 26) 「全集」第10巻, 257ページ。
- 27) 前掲書, 264—265ページ。
- 28) 「全集」1985年, 第6巻, 73—74ページ。
- 29) Alfred Fouillée, *Histoire de la philosophie*, 2<sup>e</sup> édition, Delagrave, 1879, p. 356.
- 30) ルフェーヴル「哲学」中にも, 6ページ弱のディオドロ紹介が見いだされます。Lefèvre, *La Philosophie*, pp. 267-272。そこでは、「盲人書簡」の登場人物である盲人数学者ソーндガーソンが, 臨終の場で牧師ホームズに語った次の発言がとりあげられています。「自然がとても解けないような難問を私たちに提出している場合には, それをそのままにしておこうではありませんか。この難問を解決するために, 別の存在[神]の手を借りたりなどしないようにしましょう。この存在がまた, 最初の問題以上に, 解決不可能な新しい難問になってしまうのですから。インド人に向かって, なぜ世界は空中にぶら下がっているのか, と聞いてごらんください。象の背中に乗っているから, と答えるでしょう。ではその象は, なにが支えているのか。そう問うと, 亀が支えている, と答えるでしょう。そうなるさらには, では一体なにが, その亀を支えているのか, と問わねばなりません。あなたはきっとこのインド人が哀れになってくるでしょう」と。  
ソーンドガーソンの上のことばも, もちろんディオドロの「なりゆく自然」にかかわるものではありませんが, 私がこの報告の中で問題にしているような主張とは, やや観点を異にしていますので, この報告ではこれについては触れません。
- 31) 「全集」1984年, 第4巻, 13ページ。Fouillée, *Histoire de la philosophie*, p. 1.
- 32) 前掲書, 41ページ。Ibid., p. XIV.

国際高等研究所(理事長奥田東氏, 所長岡本道雄氏)は, 1991年3月28日-30日の間, 京都都ホテルにおいて, 国際シンポジウム「誤解と創造性——19世紀日本の翻訳の問題」を開催した。

前掲二つの小文は, それぞれ3月28日朝の私の開会挨拶と, 当日午後の私の報告である。

なお, このシンポジウムの全報告を, さらに拡大し, 論文形式に書き改めたものが, 京都大学学術出版会から間もなく出版される予定である。

中川久定